

ちょっと気になる八王子マガジン

は ち と ひ



2026年 清風号

No.64

Take Free

〈ご自由にお持ちください〉



桑都の杜に新しくオープンする八王子歴史・郷土ミュージアム

特集

八王子市郷土資料館

桑都の杜に誕生！

八王子歴史・郷土ミュージアムのすべて

八王子市郷土資料館の足跡を振り返る

市民が創った八王子の博物館

学芸員厳選の逸品を紹介

私の推し収蔵品コレクション

元気印の市民団体紹介

コラム 八王子の民俗誌⑩

コラム 八王子自然探訪⑩

私の本はこうして生まれた 其の六十四

八王子・昭和史の会

祖父の食器 ― モノから想う 佐藤 広

郷土の生きている宝物 粕谷 和夫

『障害者ってどこにいますか？ ―それはもちろん、あなたのとなりに―』 杉浦 貢 著

2021年の八王子市郷土資料館展示室の閉館後、本年3月まで開館していた桑都日本遺産センター八王子博物館（はちはく）を経て、この秋「八王子歴史・郷土ミュージアム」が開館します。いままでの郷土資料館を一新させた館内は一体どのような施設なのか、開館に至る経緯や館内外の情報などをどこよりも早くお届けします。

桑都の杜に誕生！

八王子歴史・郷土ミュージアムのすべて

新博物館への機運

21世紀に入ったところ、市内上野町にあった八王子市郷土資料館では、施設の老朽化が目立ってきたことなどから建て替え・移転の話が持ち上がるようになりました。2001年に「八王子新博物館（仮称）建設基本構想について」という答申が出されたほか、2009年には八王子市都市政策研究会議から郷土資料館、図書館、公文書館が一体となった「八王子市総合情報館（仮称）」という提言も出されています。また、市内の歴史資料という点では、2007年から17年にかけての『新八王子市史』編さん事業を通じて収集された、多数の資料をどう保存す

るのかという課題にも直面していました。

そんな中、2016年に策定された「八王子医療刑務所移転後用地活用計画」において、昭島市へ移転する約5・3ヘクタールの医療刑務所跡地に、「みんなの公園」や「憩いライブラリ」とともに、「歴史・郷土ミュージアム」を建設することになり、正式に郷土資料館の移転先が決まります。

PFI事業として

新施設は、これまで博物館ではあまり前例のなかったPFI事業（公共施設の建設や維持管理、運営を民間の資金や能力を活用して行う手法）として企業公募を実施しました。事業者を公

募するにあたって、市では

条例や法令などに則することはもちろん、今後多くの市民に親しまれるような博物館として求められる要求水準も求めました。基本的なコンセプトは、これまでの郷土資料館の展示や活動を継承しつつ、八王子の歴史・文化を広く伝えていくこと。さらにさまざまな課題に対して市民や利用者が協力して解決していくこと（共創）、などを求めています。

結果として、園内全体の計画はSPC（特別目的会社）の八王子ミライテラスパートナーズ株式会社が選定され、その中で新博物館の運営は株式会社乃村工藝社が担うことに決まりま

八王子の歴史を展示する

す。決定した案を元に、事業者や学芸員らが参加する打ち合わせを幾度となく重ねて検討し、展示のための骨格が形づくられていきました。

当然のことながら、展示の肝は地域の歴史をどのように学ぶ場とするかと



◀ 八王子歴史・郷土ミュージアムの館内イメージ図



いう点に集約されます。担当した学芸員の方に伺うと、具体的には、現在市域では3万5千年前の人びとの生活の痕跡が最古のものとして確認されていますが、そこから現代に至るまでの八王子の歴史をどのように表現するかが課題となったそうです。新しい常設展示室では部屋の外周と内周で大きく内

容を分け、外周面では各時代の歴史的トピックやまちの発展のようすが一目で分かるように展示を配置。一方、内周面では、展示物に触ったり、体験したりしながら八王子の歴史が学べるような工夫を凝らしているとのこと。

たとえばかつて市内で使用されていた民具などを置いて当時の生活を体感してもらったり、実際の重さと同じ焼夷弾のレプリカを用意して八王子空襲の恐ろしさを感じてもらったりするなどして、実際に歴史に触れてもらうことを目指しています。

また、昭和初期の商店の入口を再現したり、大きなモニターで江戸時代の旅人のようなすを映像で表現したり、往時の暮らしや生き方を体験できるように工夫しています。



新しい博物館を目指して

見慣れた歴史的展示もあれば、最新の体験型や映像の展示も用意されている八王子歴史・郷土ミュージアム。「展示されたものを解説文で追うだけでなく、いままでと違った角度からの体験もできるので、歴史に触れる入口がより多様になったと思います。展示資料だけ、体験だけといった形でも良いですし、それぞれの楽しみ方で、自分が生活している八王子という場所の

歴史を知っていただければ」と新しい博物館の見どころを語るのには、学芸員の新藤典子さん。一般的にイメージされる博物館とは違い、展示品の多くに触れることができるのが特色です。また、目的別に展示室を区別していることで、静かに展示を見ることが、子どもたちと体験しながら学ぶこともできます。

さらに新博物館は「公開承認施設」を目指していて、文化庁長官の承認を受けることで文化財の公開に適した施設として認定されます。いままで市内で見ることのできなかった国内外の貴重な文化財が八王子にやってくるかもしれません。

また、八王子歴史・郷土ミュージアムはこれまでと違い、観覧を有料にして、展示の充実を図ろうとしています。学芸員の小林央さんは、「公開承認施設としてミュージアムの活動を支える施設の整備は相応の水準で整えました。今後の博物館活動に期待してください」と新たな展示への意気込みを語ります。充実した展示と集客を見込める企画展の両輪で、ハイレベルの施設運営を続けていく強い意志が垣間見えます。

市民の期待に応えるべく、郷土資料館の職員は全力で準備を重ねてきました。常設展だけでなく、開館初日から

特別展「昭和100年〜八王子万博100選〜」も開催予定とか。ワクワクするような展示資料が並ぶ歴史・郷土ミュージアムをぜひお楽しみください。

「桑都の杜」は子安町の医療刑務所跡地にできる八王子中央公園、八王子歴史・郷土ミュージアム、いこいライブラリ（図書館）、SPOT HACHIOJI（交流スペース）が有機的につながる新たな集いの拠点です。

住所 八王子市子安町3丁目26-1 TEL 042-624-5371
URL <https://sotonomori.jp/>

◆アクセス

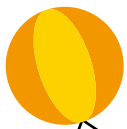
- ・JR中央線八王子駅南口から徒歩10分
- ・京王高尾線片倉駅から徒歩8分
- ・有料駐車場あり（自転車駐輪場は無料）
- ・八王子駅から自動運転バスも運行（実証運行）

◆開館時間

- ・八王子中央公園 6:00～22:00
- ・いこいライブラリ 10:00～20:00
- ・SPOT HACHIOJI 10:00～20:00
- ・駐車場：24時間

そうと
桑都の杜
もり

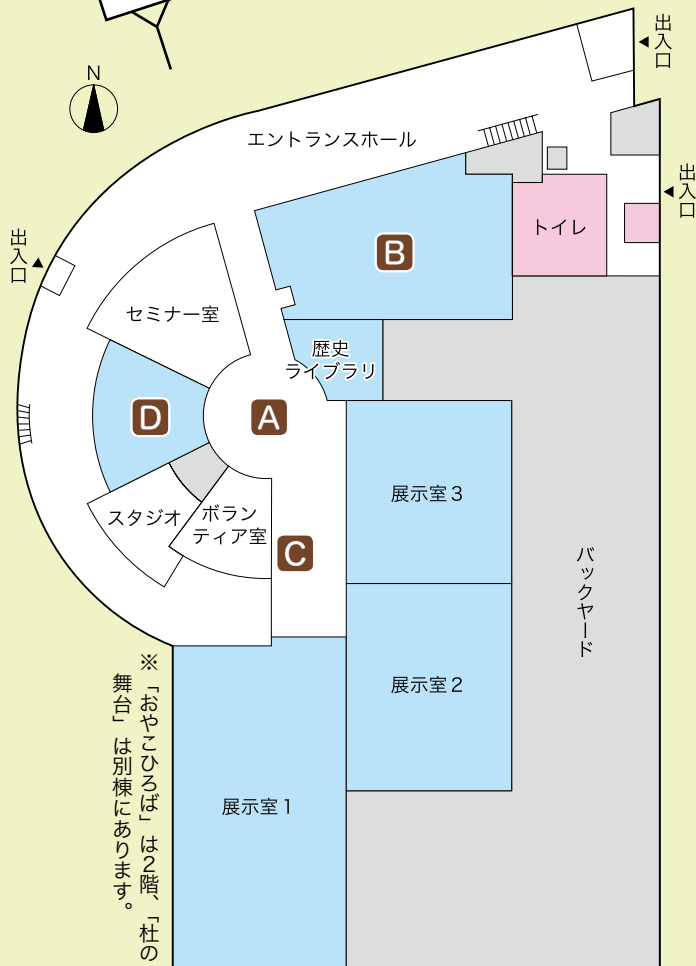
八王子歴史・郷土
ミュージアムについ
ては次ページ参照



大公開!

八王子歴史・郷土ミュージアム 館内紹介

期待が高まる新しい博物館の中でも特徴的な部分をご紹介します。
八王子の歴史をいままでと違った形で体験できるかも？



開放された空間の中で日本遺産「桑都物語」を紹介するコーナー。



ミュージアムの資料を保存しながら公開する場。
ガイドツアーも実施。



八王子の伝統的なものづくりやさまざまな工作を体験できる場。



八王子の歴史文化の研究や創造につなげる共創の場。
さまざまな人が交流し、活動できます。

八王子歴史・郷土ミュージアム

- ◆開館時間 10:00～18:00 (おやこひろばの利用と、杜の舞台・ものづくり体験室の貸室は20:00まで)
- ◆休館日 毎週月曜日 (おやこひろば、杜の舞台、ものづくり体験室は毎月の第2月曜日のみ)、館内整理日 (年10日以内)、12月29日～1月3日
- ◆観覧料金 常設展示 大人300円 中学生以下200円 (未就学児無料)

60年前の開館以来、市内の郷土の歴史・民俗の情報を発信し続けてきた八王子市郷土資料館。学校の社会科見学の好適地として、また歴史研究のよりどころとして、多くの市民に親しまれてきました。その拠点は八王子駅前開設した「はちはく」を経て、今秋、子安町の医療刑務所跡地、「桑都の杜」に移ります。八王子市郷土資料館は、市民とどのようなかわりをもってきたのか、改めてその歴史を振り返ります。

八王子市郷土資料館の足跡を振り返る

市民が創った 八王子の博物館

建設のきっかけ

八王子市郷土資料館が開館したのは1967年4月1日。公立の郷土資料館としては都内で3番目、多摩地域でも東村山市に次いで2番目に早い資料館として開設しました。貴重な収蔵資料の一角となったのが、市内の陶芸家、井上郷太郎さん（1918～2003）が機屋事業の傍らに収集していた約1700点の考古資料です。井上さんは1962年、所属していた多摩考古学研究会の有志として

▶開館直後の八王子市郷土資料館
（瀬沼和重さん提供）

「文化財は私すべきではない」と市への寄贈を申し出ます。これをきっかけに同年、「井上郷太郎コレクションの市移管を推進する会」が結成されました（後に「郷土資料を保存する会」と改称）。また1963年頃、市内を東西に貫く中央高速自動車道建設にともない、八王子インターチェンジにあたる宇津木向原に古代住居跡や大量の埋蔵文化財が発掘されます。当時は市内各地の道路や宅地開発のたびに新たな遺跡が発掘され、そのたびにメディアを賑わわせ、「考古学」が一躍



▶開館式典の際の来賓たち。左から3人が井上郷太郎さん*

脚光を浴びていました。次々と発掘される考古資料に対して、文化財保護運動が展開され、郷土資料を保存する会は郷土資料館を建設するよう市へ陳情を出します。

こうした努力が実を結び、翌年開催される東京オリンピックの記念事業として、市民会館の道路を挟んだ向かい側に郷土資料館を建設することが決定しました。

待望の資料館開館

開館した八王子市郷土資料館は、正倉院の校倉造りをまねた高床式の2階建てで、1



◀開館当時のポスター*



▶八王子市郷土資料館開館当時の館内ようす*

階入口正面に特別展示室、左手に第1展示場、2階に第2展示場、集會室などを設置していました。また、開館に尽力した学職経験者や郷土史家、市内学校長、有力者など30名ほどの運営委員会は特別展の

企画・展示や解説文を作成するなど、開館後にも積極的にかかりました。同年には早速特別展として「武州下原名刀展」を開催。以降、遺跡発掘調査の成果や八王子織物、八王子宿や北条氏照、千人同心など、八王子の歴史・民俗にまつわるさまざまな題材を取り上げた企画展を実現させていきます。

開館翌年に博物館法による登録を受け、名実ともに博物館としての資格を備えます。1974年に多摩地域の博物館が結集して「東京都三多摩公立博物館協議会」が発足し、加盟しました。また、開館以来有料だった入場料（大人30円、学生・子ども10円）は、1971年には博物館法の理念に則る形で無料になりました。



展示だけでなく

郷土資料館はただ展示するだけの施設ではありません。イベントや刊行物を通して市民に向けて積極的に情報を発信してきました。

1969年からは「郷土の歴史を探究する会」を開催。運営委員などが講師となつて、歴史の流れの中で八王子がどのような位置を占め、またそれが日本史とどのようなつながりを持っていたのかを学ぶための講座を開いたり、1974年には夏休みの子どもの自由研究などに対応するため、郷土史家や学芸員が子どもたちの質問に答える「親子の歴史相談」を開始しました。このほか講演会や映画の会、車人形公演なども随時開催し、市民に対して開かれた博物館を目指していきま

した。1977年には「八王子市郷土資料館だより」を創刊して、館内外の情報発信に乗り出します。

1985年に『八王子の空襲と戦災の記録』（総説編・資料編・市民の記録編）、1992年には『八王子千人同心史』（通史編・資料編）を刊行したほか、研究紀要を年1回刊行したり、各展示会の図録を作成したりしてきました。

1978年に開催した「ね

がい展」では、事前調査をきっかけに「桑都民俗の会」が発足。以降、会報を発刊し、市内各地の在野の研究者による民俗研究が蓄積されていきます。このように郷土資料館の取り組みは、市民による文化活動が生まれる場でもありました。



市民の積極参加

2001年からは主に展示を案内するガイドボランティア活動がスタートします。最初のボランティア募集に応募して以来、四半世紀にわたって活動をしてきた成瀬正吉さんは、「最初は応募が殺到して、選ばれなかった方も多数いました。すぐに2期、3期と募集がかけられました」と振り返ります。郷土史に関心を寄せていた市民の多さが窺えます。

ガイドボランティアの大きな仕事の1つが見学客への対応。特に学校見学で訪れる子どもたち相手には、「いかに分かりやすく伝えるか」に苦心しました。その一環として

八王子市郷土資料館年表

年	出来事
1962	多摩考古学研究会有志が井上郷太郎コレクションの受け入れについて市に要望を出す。井上郷太郎コレクションの市移管を推進する会誕生（同年、郷土資料を保存する会と改名）
1963	郷土資料を保存する会が郷土資料館建設について市へ陳情。市議会でもオリンピック記念事業として郷土資料館を建設すると言明
1964	井上コレクション寄贈式
1965	郷土資料館建設着工（翌年竣工）
1967	郷土資料館開館。特別展「武州下原名刀展」開催
1968	博物館法により登録を受ける
1969	以降毎年「郷土の歴史を探究する会」開催
1971	入館料無料に
1974	東京都三多摩公立博物館協議会発足、加盟。「親と子の歴史相談」開始
1977	「八王子市郷土資料館だより」創刊号発行
1985	『八王子の空襲と戦災の記録』刊行
1992	『八王子千人同心史』刊行
2001	ガイドボランティア活動開始
2016	「八王子医療刑務所移転後用地活用計画」策定
2017	『新八王子市史』編さん事業終了
2021	八王子市郷土資料館展示室閉館。「はちく」開館
2026	はちく閉館。 桑都の杜に「八王子歴史・郷土ミュージアム」開館

ボランティアの方々は年表やかるた、紙芝居（「はちとび」27号参照）などを作成しています。いずれも有志が「八王子の歴史を語る上で、こういうものがあつたらいいな」という思いから自ら企画、作成したもので、郷土資料館もボランティアの自主活動を積極的に支援していきました。

郷土資料館で行われている市民活動の1つに、「古文書を探る会」があります。その会の古文書解読で特に活躍されてきたのが、千人同心史編さんにかかわった、今は亡き

光石知恵子さん。光石さんは

研究紀要などへの論考執筆を重ね、近世八王子の実相を詳らかにしていきます。それらを通じて光石さんは、「文書に暮らす庶民の生活がいかに変化に富み、生き生きとした歴史にいろどられた、魅力にみちた町であるかを実感するにたるものでした」と自著『近世八王子の研究』に記しています。郷土資料館での作業そのものが、八王子のまちの姿を深く知る契機となつて

はちはく開館

2021年3月、八王子市郷土資料館の展示場が閉館し、その直後の6月に桑都日本遺産センター「八王子博物館（はちはく）」が開設されます。前年に八王子の「霊気満山 高尾山く人々の祈りが紡ぐ桑都物語」が日本遺産に認定されたことで、その魅力を伝え、発信する施設としての役割も担っていました。

何よりも八王子駅直結の商業ビルの中、いままでよりも明るい展示空間であつた「はちはく」

は、気軽に入れる博物館として市民に親しまれ、5年間で23万人が訪れました。駅近くのまちなか避暑地でもあり、御城印の販売やマンホールカードの配布などもしていたため、ふらつと訪れる方も数多くいたとか。一方、土日になると毎週のように訪れる熱心な子もいたといえます。ただ、規模が小さく、歴史・民



◀「はちはく」館内ようす*

市民とともに創る

新しい博物館では、いままでとは一味違う展示空間が開される予定です。それが見どころの1つになることは間違いないのですが、一方で当初から新博物館構想でうたっているように、「市民とともに創る」こともまた現代の博物館の大切な一側面といえます。

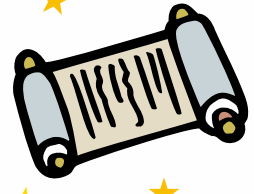
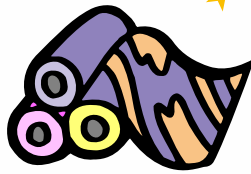
八王子というまちが現在に至るまでいかにして形成されてきたのか。それを示すには「モノ」をただ展示するだけでなく、それにかかわる「ヒト」が見える展示も必要なのです。「ヒト」の見える生きた展示を創り上げるためには、ボランティアをはじめ、多くの市民がかかわることも大切なことといえるでしょう。60年にわたって市民の歴史研究の拠点を担ってきた八王子市郷土資料館や「はちはく」の財産を通じて、八王子歴史・郷土ミュージアムのあべき姿が見えてくるのではないでしようか。

*のついた写真は、八王子市郷土資料館提供



▲絹の道資料館での小学生への解説（上）や、「はちはく」で展示されていた高機体験*（下）など、ガイドボランティアの方々の活動は欠かせない。郷土資料館のボランティアは絹の道資料館でもガイドをしていた。

私の推し



収蔵品コレクション

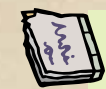


八王子市で収蔵してきた史料は市所有のもので約22万点。代表的なものとして陶芸家井上郷太郎さんから寄贈を受けた考古資料、市内開発に伴って発掘された土器や石器、さらに北条氏や八王子千人同心にまつわる文書のほか、絵図や民具など、種類も多岐にわたります。ここではこうした収蔵品に日々接している学芸員のみなさんに、有名無名にかかわらず思い入れのある史料を挙げていただきました。いつもの展示紹介とは一味違う、郷土資料館の逸品をご紹介します。

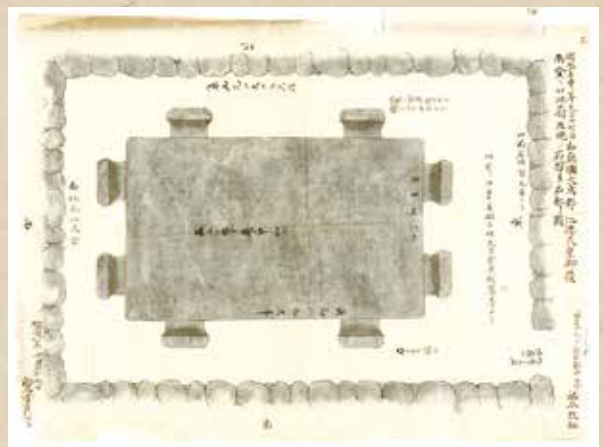
※画像は八王子市郷土資料館提供



昭和39年（1964）の東京オリンピックで八王子は自転車競技会場になりました。これはそのときの日本チームの競技用自転車。当時実施されていた2人乗りで、競技場（トラック）を周回して勝敗を決めるタンドムスプリントレースで使用するものです。日本チームは何台かの開発車を準備し、試乗の上で乗車する車両を選びました。実際は（伊）チネリ製が使用されたようですが、この車両は、FUIJI製のものです。現在国内唯一の1964年オリンピック東京大会日本チームのタンドム自転車です。
（小林央・選）



タンドム（2人乗り） 用 競技自転車



当館では大仙陵古墳（伝仁徳天皇陵古墳）で発見された石槨（石室）と石棺を描いた2枚の絵図を所蔵しています。明治5年（1872）9月、古墳前方部南斜面の一部が崩れ、竪穴式石室と長持形石棺が露出し、柏木政矩が絵図を残しました。同8年、八王子出身の国学者落合直澄は、柏木図をもとに模写した2枚の絵図を手に入れ、持ち帰ったと考えられます。令和7年（2025）には、柏木が調査のために持ち帰ったとされる刀子の一部などが発見されました。
（加藤典子・選）



仁徳天皇御陵石棺図（落合家文書）



『八王子』（大正15年発行）

大正6年（1917）に市制施行した八王子市は、大正15年に市制10周年を迎えます。八王子市は記念祝賀式を10月1日に開催し、記

念事業の一環として『八王子』を発行しました。編さんには小学校の教員らがあたり、初めて市の通史を記述したものです。絹織物の産地として全国に名を知られた八王子の沿革・市勢・教育・史跡名勝などが266ページにわたって紹介されています。当時の八王子のまちの様子がうかがえる300店以上の商店広告も、この本の楽しみ方のひとつです。



（中村明美・選）



ジョッキ形土器

八王子市には国指定史跡となっている棚田遺跡、縄文時代の集落遺跡として有名な宇津木台遺跡や滑

坂遺跡など数多くの遺跡があり、多くの土器が出土しています。今紹介する土器は、寺田町に所在する日南田遺跡の住居跡から出土したジョッキ形土器です。口径8cm、高さ13・8cmの小型で、片側に空洞の大きな把手がついているのが特徴です。ほぼ完全な形で出土しました。今でも飲み物を入れて楽しめるような土器です。



（村山修・選）



木食白道作 恵比寿・大黒天像

柔和な微笑みの特徴の恵比寿・大黒天像。ぴったりサイズの箱に納められた恵比寿は、もっと広い場所に入りたがってよく働くので家が繁栄するといわれています。作者の木食白道は、宝暦5年（1755）に甲斐国に生まれ、木食修行を積んで各地を廻った作仏聖です。江戸時代後期の天明から寛政年間、文化・文政年間に多摩地方を訪れました。旧所有者の下恩方川原宿の旧家は、白道に宿を提供したといわれており、その御礼として貰ったと考えられます。

（美甘由紀子・選）



北条家朱印状（小松家文書）

天正15年（1587）7月に小田原北条氏が鶴之森（相模原市南区鶴野森）の小代官と百姓中に対して、動員を前提とした名簿の作成・提出を命じた文書です。豊臣政権との対決が迫る中、同内容の朱印状が相模・武蔵の郷村に十数点出されました。直接八王子市域に関わる史料ではないものの、市内に在住した郷土史家の小松茂盛氏（1899〜1970）が収集し、郷土資料館に寄贈した文書のうちのひとつです。虎朱印が少し左上がりなのが特徴です。

（柳沢誠・選）





の市民団体紹介

応援します
市民力。

市内で活躍する元気な団体・サークル・同好会を紹介するコーナーです。
活動内容やイベント情報など、編集部までお知らせください。

◆例会：おおよそ隔月に1回、土曜日14:00～
17:00、クリエイティブホールなど

◆お問い合わせ先：080-3463-0602（齊藤）

八王子・昭和史の会

小さな気づき、大きな発見

広大な市域の随所で歴史的見どころが見られる八王子。そんな市内の昭和史をさまざまな角度から検証しているのが「八王子・昭和史の会」です。

代表を務めるのは『八王子の空襲と戦災の記録』や『新八王子市史』の編纂にもかかわり、『ガイドブック八王子の戦跡』や『中央本線419列車』、『浅川地下壕』などの著書を多数執筆してきた齊藤勉さん。これまで関心を寄せてきた八王子の歴史をさらに深く学ぶ場として、また次世代への知識を継承するために知人を集め、2023年から活動を始めた。特に力を入れてきたのは市内戦跡、戦争体験者の記録や田町の遊郭にまつわる調査・研究などですが、「昭和史」という軸以外に会には特に決まった方針はありません。活動を通じて現役世代の20代から八王子空襲を体験した90代の方まで幅広いメンバーが徐々に増えていき、それぞれの関心事や活動を随時報告して共有しながら、八王子の昭和史を探究しています。時に講演会を開いたり、フィールド



▲フィールドワークのようす

ワークを開催したりすることでメンバーの見聞を広め、それをまた幅広く市民に還元しようと模索を続けています。

齊藤さんは「自分の体験の価値は自身では分からないという方が多くいると思いますが、それこそが昭和史の中の貴重な出来事だったりもします。埋れている歴史の1ページを明らかにし、紹介していくことで、消えゆくような八王子の歴史を残していきたいです」と意気込んでいます。今後は会報などを作成することで、調査内容を市民に届け、記録として残すことも目指しています。昭和も歴史の一部となってきたいまだからこそ、改めて身近な過去に触れてみてはいかがでしょうか。

多摩産材の木製オブジェ

市役所にある 知っていますか？

八王子市役所本庁舎1階のセブンイレブン前に、100%多摩産材を使い、日本建築の伝統的な工法で作された木製オブジェが設置されています。これは八王子市職員組合が企画し、八王子市当局と協議しながら八王子市職員等事業本部、建設ユニオン多摩支部、秋川木材協同組合が共同で作成し、設置したものです。



製作にあたっては、図版の製図から始まり、墨付け、番付、刻み、仕口の「小胴突き」まで、美しくかつ強度も高める工夫がされています。多摩産材を活用し、日本建築の伝統工法を紹介しながら、地球環境と歴史文化の継承を志向する市役所内の隠れたお宝です。

今後、八王子自治研究センターでは昭和の八王子の写真パネルを貼るなどして、この木製オブジェを有効に活用していきますので、ぜひご期待ください。

お問い合わせ

八王子自治研究センター

八王子市元本郷町3-17-15 ハマナカビル2階
TEL. 626-7714 FAX. 621-6423

※ここは「はちとぴ」を応援して下さっている方々に自由に使っていただくフリースペースです。今回は「八王子自治研究センター」です。

祖父の食器 — モノから想う



▲墓地で出会った祖父の食器

知らない人が手にしたら、ポイッと捨てられるような茶碗たち、約半世紀前に私が手にした。祖父は顔も知らない孫に、何か語りかけたかったのかもしれない。

道楽者の祖父から血だけではなく、名前も1字いたいたて私の名とした。祖名継承で日本の伝統的な命名慣行だ。

1920（大正9）年の国勢調査の申告書によれば、1840（天保11）年生まれの曾祖父、祖父・祖母とその子7人の10人家族だ。明治・大正、そして昭和はじめと、祖父は大変な時代を生き抜いて後につないでくれた。

多摩ニュータウン建設の際、家屋に先立って墓地移転を行った。1975（昭和50）年10月に家族でハカバ（墓場）を掘った。私は祖父が埋葬されている辺りを担当する。1864（元治元）年に生まれ、1934（昭和9）年に没した祖父は、今のような寝棺での火葬ではなく、座棺で土葬された。座棺は桶のような棺に、膝を折り曲げ、座らせて遺体を収めた。深さ2・5メートルくらい掘った。土葬では、座棺は寝棺より占める面積は狭いが深い。座棺ゆえに遺骨はまとまっていた。祖父が日常的に使っていた湯呑・茶碗・皿も出てきた。箸は失せていた。

日常使いの食器は、箱膳（ゼンバコ）ともいう箱型の膳）の中に収納し、蓋を裏返して、その上に食器を置いて食事をした。食べ終わると茶碗にお茶を注ぎ、漬物ですすいで飲み、食器を箱膳の中に収めた。家族銘々の箱膳は優勝手の戸棚に入れておいた。食器は毎日洗うわけではない。数日に一度くらいだ。

古くは麦飯といつて大麦を長時間煮て食べ、次に挽いて砕いた大麦と米を混ぜた挽割飯を食べた。大正から昭和はじめには押麦に米を混ぜ、汁と漬物と煮物の食事であったと思う。戦後はのぎびしい暮らしが唄はれる。戦後は床に座って家族で、ちゃぶ台を囲んで食事をするようになった。

堀之内に行ったとき、1897（明治30）年生まれの方から祖父の話が出た。「由木村（市内由木地区）で最後までチョンマゲを結って、馬にのって剣術をやっていた」と聞いた。なんと道楽ジイさんではないか。

郷土の生きている宝物

八王子自然探訪 16

八王子・日野カワセミ会 会長 粕谷 和夫

郷土資料館は郷土資料を専門的に扱う施設で、地域の歴史や文化、民俗、人物に関する情報を収集・保存・展示することを目的としている。今号の「はちとび」の特集は八王子市郷土資料館ということで、八王子自然探訪は「郷土資料」と直接関係はないが、「郷土の生きている宝物」として高尾山のブナ、八王子の里山に生息するモリアオガエル、八王子の河川のゲンジボタルの3つの探訪について取り上げてみたい。

世界遺産の白神山地はブナ林で有名だが、高尾山でも標高470メートル付近で立派なブナを見ることが出来る。高尾山全体にあるブナは現在70本くらいあるという。たとえば薬王院（奥ノ院）には「地蔵ブナ」があり、いろはの森コースには高尾山中のブナで一番美しいと言われる「美人ブナ」の姿を見ることが出来る。今回掲載する写真は2022年9月に1号路のケーブルカー高尾山駅付近で撮ったもの。この年はブナの実が大豊作で、カケスやヤマガラが盛んにこの実を食べていた。

モリアオガエルは木の枝にソフトクリームのような泡で包まれた卵を産みつけることで有名で、市内の里山に行けばどこでも見られる。圏央道の八王子西IC近くの小津町には「モリアオガエルの道」があり、6月にこの道を歩けば泡で包まれた卵に出合えるかもしれない。

ゲンジボタルは昭和20年代、浅川の



▲ブナとその実 2022年9月 高尾山1号路にて